

詩の生成
—「コブレンツの思い出」から「不安な死者たち」へ—

中 島 淑 恵

富山大学人文学部紀要第64号抜刷

2016年2月

詩の生成 —「コブレンツの思い出」から「不安な死者たち」へ—

中 島 淑 恵

承前

これまで筆者は、フランス国立図書館所蔵のルネ・ヴィヴィアン（本名ポーリーヌ・メアリ・ターン）の少女時代の草稿¹⁾の精査を通して、普仏戦争の激戦地コブレンツを訪れた一夏の体験が、散文の印象記から韻文の詩に変容する過程を観察してきた²⁾。とはいえ、それらはすべて、未発表に終わったヴィヴィアン少女時代の草稿の中に見出されたものであって、真の意味で「作品」とみなせるものであるかどうかについては判断を控えてきた。

しかし、これら草稿の精査によって浮かび上がってきた「コブレンツの思い出」という、「作品」としては未発表の詩と様々な共通点を持つ作品が、ヴィヴィアンの処女作『習作と前奏曲 (Études et Préludes)』³⁾に収められていることが逆に照射されるという結果をもたらした。それが小論で精査しようとしている「不安な死者たち « Morts inquiets »」である。この詩は、大多数が恋愛詩である『習作と前奏曲』の中にあつて、唯一恋愛を直接的なテーマとせず戦争をテーマとした詩であり、筆者がかねてよりその異質性に注目してきたものである。この詩そのものの分析からは、従来その異質性が説明できなかったのであるが、「コブレンツの思い出」を出発点としてさらに彫琢を加えられた詩作品だと考えると、その特徴がよく理解できるように思われる。小論ではまず、『習作と前奏曲』において、この詩がどのように異質であるかについて論じた上で、この詩の分析を行い、それが「コブレンツの思い出」からどのような特徴を継承し、あるいはどのような点において異なるのかを精査してみたい。そのうえでさらに、ヴィヴィアンの死後発表されたもうひとつの「不安な死者たち」について考察の射程を広げてみることによって、「作品」というものがどのように生成して変容して行くのかについて、ささやかな論考を試みたいと考えている。

1. 『習作と前奏曲』における「不安な死者たち」の異質性

『習作と前奏曲』は、1901年、アルフォンス・ルメール社から出版された。奥付には4月17日印刷完了とある。当時の無名の象徴派詩人たちの多くと同様に、自費出版で330部しか出版されなかったといわれている⁴⁾。このときの著者名はR. Vivienと名の方は頭文字のみで記され、全く無名の詩人の処女作としてパリの詩壇に迎えられた。同名の詩人は、1902年には立て続けに詩集『灰と塵 (Cendres et Poussières)』(5月27日印刷完了)⁵⁾と小話集『フィヨルド

の霧 (*Brumes de Fjords*)』(6月21日印刷完了)⁶⁾を、1903年には詩集『喚起 (*Évocations*)』(1月24日印刷完了)⁷⁾を、いずれもアルフォンス・ルメール社から発表するが、世にその本名が知られることも、この詩人が実は女性であることもその時には知られることはなかった。献本に敢えて男性名の René Vivien と印刷された名刺が添えられていたこともあって⁸⁾、その詩風にサッフイスムの気配を感じさせることはあっても、それはかのボードレールやヴェルレーヌも試みたものなのであって、女性がサッフイスムを歌った詩だと見抜かれることはなかったようである。

1903年には、サッフオの詩の翻訳集『サッフオ (*Sapho*)』が、女性名のルネ・ヴィヴィアン (Renée Vivien) 翻訳として発表される(3月3日印刷完了)⁹⁾。こうして自らが女性であること、サッフオ流の愛に生きる者であることを表明したのちヴィヴィアンは、別の筆名で発表されたもの¹⁰⁾を除き、すべての作品をこの名で発表するようになる。また、1903年のうちに、先に R. Vivien の名で発表された『習作と前奏曲』および『灰と塵』の第2版が、Renée Vivien という女性名で、リュシアン・レヴィ・デュルメールの版画を表紙に出版される¹¹⁾。

小論で扱う「不安な死者たち」は、『習作と前奏曲』の初版37編中31番目の詩で、125頁から126頁にかけて収められているが、第2版からは他の3篇とともに削除されている。第2版では、「不安な死者たち」のほか、「シャンソン (Chanson)」が1篇、「永遠の復讐 (L'Éternelle Vengeance)」、「アマゾン (Amazone)」の4篇の詩が削除されている。そのほか、タイトルが変更されていたり、収録される順番が異なっていたりするものもある。さらには、そのまま収録されている詩でも細部に推敲のあとが見られ、単なる単語の変更からほとんど改作とってよいものまで初版とは様々に異なっている。

第2版で削除された「不安な死者たち」以外の3篇の詩は、その後1923年にアルフォンス・ルメール社から出版された『ルネ・ヴィヴィアン詩集 (*Poèmes de Renée Vivien*)』¹²⁾に収められるまで日の目を見ることはなかったが、「不安な死者たち」だけは、ヴィヴィアンの死から6年後の1915年7月1日付の『メルキュール・ド・フランス (*Mercur de France*)』誌¹³⁾に、1901年に作られたものの未発表であったヴィヴィアンの詩として、初出時とはかなり異なるものとして紹介されている。この1915年版の「不安な死者たち」については、小論の末尾で検討することにした。

次に、「不安な死者たち」が初版の『習作と前奏曲』に収められた他の詩とどのように異なるのかを検討するために、この詩集にはどのような詩が収められているのかについてここで概観しておきたい。まず、初版の索引は、以下の通りとなっている。実際の索引に示されているのは以下の表の仏文タイトルと頁数のみである¹⁴⁾が、ここでは分析の便宜のため左欄に番号を振り、次に原文タイトル、その右欄にタイトルの和訳を付した上で、備考欄に第2版で削除されているもの、順番が異なっているもの等についてその旨注記を付けている。

	原詩タイトル	タイトル和訳	備考（第2版での変更の有無等）
1	Dédicace	献辞	題名が A la Femme aimée に変更。
2	Bacchante triste	悲しきバッカント	特に4連がほぼ完全に改作。
3	Chanson	シャンソン	句読点1箇所以外変更なし。
4	<i>Le couchant adoucit</i>	落日は和らげる	半句と韻の1箇所変更あり。
5	Sonnet	ソネット	特に3連が大幅に改作。
6	Soir	夕べ	7の詩と順序変更。一部変更あり。
7	<i>Ta forme est un éclair</i>	貴女の姿は稲妻	6の詩と順序変更。特に2連が改作。
8	Aurore sur la Mer	海の曙	詩句の一部変更あり。
9	Chanson	シャンソン	削除。
10	Ondine	オンディーヌ	一語のみ変更あり。
11	Victoire	勝利	2連は完全削除。他に一部変更あり。
12	A l'Amie	恋人に	一部変更あり。
13	Chanson	シャンソン	一語のみ変更あり。
14	L'Eternelle Vengeance	永遠の復讐	削除。
15	Sonnet à la Mort	死へのソネット	複数箇所に変更あり。
16	Nudité	赤裸	一部変更あり。
17	Aube incertaine	不確かな夜明け	複数箇所に変更あり。
18	Chanson	シャンソン	変更なし。
19	Lucidité	明晰	一行のみ完全に変更。
20	L'Odeur des Vignes	葡萄の匂い	複数箇所に変更あり。
21	<i>Elle écarte en passant</i>	彼女は遠ざける	特に2連に大幅な変更あり。
22	Sourire dans la mort	死における微笑	変更なし。
23	Sonnet	ソネット	一部変更あり。
24	Chanson	シャンソン	変更なし。
25	Les Yeux gris	灰色の眼	複数箇所に変更あり。
26	Naiade moderne	現代のナイアード	複数箇所に変更あり。
27	Sonnet	ソネット	複数箇所に変更あり。
28	<i>Le souffle violent</i>	激しい突風が	題名が Cri に変更。内容も大幅に変更。
29	Chanson	シャンソン	変更なし。
30	Sonnet	ソネット	複数箇所に変更あり。
31	Morts inquiets	不安な死者たち	削除。
32	Sommeil	眠り	変更なし。
33	Sonnets	ソネット	特にIIはほぼ完全に改作。
34	Chanson	シャンソン	25「灰色の眼」の前に移動。変更なし。
35	Amazone	アマゾン	削除。
36	Sonnet	ソネット	3「シャンソン」の前に移動。変更あり。
37	Nocturne	ノクターン	一部変更あり。

こうして見てみると、第2版で変更を加えられていないものはほとんどなく、変更なしとなっているものは「シャンソン」など比較的短い詩形のもの5篇のみである。ヴィヴィアンはたゆ

まざる推敲の人であったといわれているが、このような夥しい異同は、それを裏付けるものであるといえよう。この異同の詳細についても『習作と前奏曲』初版と第2版の質的な相違を論ずるうえで重要であると考えられるが、これについては稿を改めて論じることとして、ここでは「不安な死者たち」の特徴に絞って考察を進めることにしたい。

先の表を一見して分かるように、この詩集には、形式が題名となっているものが数多くある。すなわち「ソネット」7篇と「シャンソン」7篇である。「ソネット」と題されたものはいずれもアレクサンドラン（12音綴詩句）のソネット形式（4行詩2連3行詩2連）であり、「シャンソン」と題されたものはいずれもオクトシラブ（8音綴詩句）で構成されていて、4行詩が2連または3連、多いもので5連から構成されている比較的短い詩形となっている¹⁵⁾。その他の詩は、4行詩が数連連なったものが多く、「不安な死者たち」もアレクサンドランの4行詩6連で構成されていて、脚韻は交差韻となっている。形式上は他の詩と比べてとくにこの詩だけが異質であるということはいえないが、『習作と前奏曲』の中では比較的長い詩であるということはいえるだろう。

次に、これもテキスト上に形式として発現するものではあるが、発話の主体が1人称（je）であることが明示されているか、また、その相手が恋愛対象の2人称（tu または vous）であるか、すなわちディスクール型¹⁶⁾の発話であるか（表中ではDと表示）、あるいは、1・2人称が発現せず、3人称で描写されるレシ型の発話であるか（表中ではRと表示）、ということについて確認を行う。さらに、ディスクール型の発話の場合、それぞれの人称が男性あるいは女性¹⁷⁾であると断定できる要素があるか否かについても以下に整理しておく。また、レシ型の発話である場合、そこで描写される客体としての主語が主に何であるかについて補足的に確認しておく。

	原詩タイトル	D/Rの別	D:1人称の性	D:2人称の性	R:3人称の種類
1	Dédicace	D	不明	女性	
2	Bacchante triste	R			elle
3	Chanson	D	不明	女性	
4	<i>Le couchant adoucit</i>	D	不明	不明 robe	
5	Sonnet	D	不明	女性	
6	Soir	D	不明	不明 robe	
7	<i>Ta forme est un éclair</i>	D	不明	不明	
8	Aurore sur la Mer	D	不明	不明	
9	Chanson	D	不明	不明	
10	Ondine	D	(je) 不明	不明	
11	Victoire	D	不明	女性	
12	A l'Amie	D	不明	不明	
13	Chanson	D	不明	不明 seins	
14	L'Eternelle Vengeance	R(D)			elle
15	Sonnet à la Mort	D	不明	女性	
16	Nudité	D	不明 je, nous	不明 seins	

17	Aube incertaine	D	不明 je, nous	不明	
18	Chanson	D	不明	不明	
19	Lucidité	D	不明	女性	
20	L'Odeur des Vignes	R			elle
21	<i>Elle écarte en passant</i>	R	不明 (je)		elle
22	Sourire dans la mort	D		不明 vous	
23	Sonnet	D		不明	
24	Chanson	D	不明	不明	
25	Les Yeux gris	D	不明	不明	
26	Naïade moderne	D	不明	不明 robe	
27	Sonnet	D	不明	不明	
28	<i>Le souffle violent</i>	D	不明	不明	
29	Chanson	D	不明	女性	
30	Sonnet	R			elles
31	Morts inquiets	R			ils
32	Sommeil	D	不明	不明	
33	Sonnets	D	不明 nous	不明	
34	Chanson	D	不明	不明	
35	Amazone	R			elle
36	Sonnet	D	不明	不明	
37	Nocturne	D	不明	女性	

こうして見ると分かるように、『習作と前奏曲』に収められた詩は、圧倒的にディスクール型の詩が多く、恋する主体が恋の相手に対して語りかけているタイプの詩が大半を占めていることが分かる。また、恋する主体の性別は、どの場合にも男性とも女性とも断定できないもので、必ずしも同性愛を歌ったものとは断定できない。さらに、恋愛の対象となる2人称の相手も、文法的に完全に女性だと断定できるものは全体の4分の1程度で、そうでないものでも「ドレス (robe)」「髪 (cheveux)」「胸 (seins)」などの属性から女性とみなし得るものがいくつかあるものの、当時流行していた異性装の可能性や、対象となる人物が美しい青年である可能性を完全に排除できるものではない。このように考えると、少なくとも『習作と前奏曲』の初版は、必ずしも女同士の同性愛を女が歌った詩集とはみなされ得ない、ということが分かる。むしろ、レシ的即ち描写的な詩である30番のソネットに語られる「彼女たち (elles)」の振る舞いは、「レズビアン的倦怠 (langueurs lesbiennes)」¹⁸⁾を物語るものとして描かれているが、このように女同士の愛を男性詩人が歌う例は、ボードレールやヴェルレーヌにも見られることから、当時これらの詩が、先達の系譜に連なる男性詩人の筆になるものだと考えられたとしても無理はないだろう。

ところで、これとは裏腹に、小論で問題にしている「不安な死者たち」だけは、描写的な詩であると同時に、描かれる対象である3人称が男性複数形の「彼ら (ils)」である、というこ

とも他の詩と大きく異なる特徴であるということが分かる。そして、『習作と前奏曲』第2版で削除された4篇のうち3篇はレシ的な作品なのであって、したがって第2版では、初版よりディスクールの作品が圧倒的多数になっているということが分かる。さらに「不安な死者たち」が排除されたことによって、「彼ら」が描写の中心となる詩は姿を消し、描写的な他の詩も含めて、詩集全体の世界観が女たちのみの世界（ムンディス・ムリエプリス）へと大きく変容しているさまが観察できる。

こうして見てくると、形式上の異質性から見て、第2版から「不安な死者たち」が排除されたのは自明であるように思われるが、それではなぜ初版には敢えてこの異質な詩が盛り込まれていたのであろうか。ヴィヴィアンは19世紀末に成年に達し、かなりの相続財産を持ってパリに単身戻り、満を持して詩人としてのデビューを目指したはずである。処女詩集『習作と前奏曲』の冒頭には、「N…へ (À N…)」という献辞があり、この詩集は当時の恋人であったナタリー・クリフォード・バーネイに捧げられたもので、2人称で語り掛けられる恋人の女性の姿にはバーネイのそれが投影されていると考えるのが従来の定説である。しかし、わずかに残された少女時代の草稿とこれらの詩を照合させると、おそらく少女時代から作りためてきた詩の断片あるいは全体が、この詩集のそここに姿をとどめているさまを観察することができるのではないと思われる。ヴィヴィアンの草稿の大部分はその死後、恋人でもあり保護者的存在でもあったエレヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルトがその手元に留め、遺族のもとに残されたものはわずかであることが知られている。したがって今日我々が目にするのできるヴィヴィアンの草稿は、遺族の手元に残された少女時代の詩の草稿群と、フランス国立図書館に寄贈された、同じく少女時代の創作ノート、そして同じ時期に文通し詩の添削を受けていたらしいアメデ・ムレの手元に残された手紙に含まれる詩の草稿群のみなのであって、そこから創作の軌跡をたどることのできる詩は、実に限られたものでしかない。「不安な死者たち」が、少女時代の創作ノートから「作品」への過程を、段階を経て辿ることのできるほとんど唯一の作品であることは、ヴィヴィアンの詩作の軌跡を辿る上で、奇跡的なケースであると言わざるを得ないのである。

2. 「不安な死者たち」と「コブレンツの思い出」

それでは、そのままの形では日の目を見ることのなかった「コブレンツの思い出」は、処女詩集『習作と前奏曲』に収められた「不安な死者たち」において、どのような形で変容し「作品」として昇華しているのであろうか。

以下に、「不安な死者たち」の全文を挙げ、先の論考で検討した「コブレンツの思い出」と、どのような点においてそれが類似し、どのような点において異なっているかについて検討することにする。ここでは読者の便宜のために、右欄に拙訳を付すことにする。

Morts inquiets

不安な死者たち

Les éclats de la fanfare et l'orgueil des cymbales, 吹奏楽団の煌きとシンバルの誇りが
Réveillant les échos, se prolongent là-bas, こだまを呼び起こし、彼方にたなびいて行く、
Et, sous l'herbe sans fleurs des fosses martiales, そして、塹壕の花もない草の下に
Les guerriers assoupis rêvent d'anciens combats. まどろむ戦士たちは古い戦を夢見る。

Ils ne s'enivrent point des moiteurs de la terre 彼らは大地の湿りに酔うことは絶えてなく
Tiède de baisers las et de souffles enfouis... 大地は倦んだ接吻と埋められた息で生ぬるく
Seuls, ils ne goûtent point l'enveloppant mystère, 彼らは孤独で、包み込むような神秘も、
La paix et le parfum des immuables nuits. 物言わぬ夜の平和も香りも最早味わうことはない

Car leur sépulcre est plein de cris et de fumée なぜなら彼らの墳墓は叫びと煙に満ちているから
Et, devant leurs yeux clos en de pâles torpeurs, そして青ざめた麻痺のうちに閉ざされた眼の前を
Passe la vision de la plaine embrumée 霧にむせぶ平原の光景が通り過ぎる
D'haleines, de poussière et de rouges vapeurs. 吐息と誇りと赤い蒸気の

Ils attendent, tout près à se lever encore, 彼らは待機し、いつでも起きられるように、
Les premières lueurs, le clairon du réveil, 最初の曙光、起床のラッパの音、
Le lourd piétinement des chevaux à l'aurore, 暁に歩を進める馬の重い足取り、
Les chansons du départ... et la marche au soleil ! 出発の歌、そして太陽のもとの歩み。

Que le ciel triomphal du couchant leur rappelle 落日の勝利の空が彼らに思い出させる
Les vieux champs de bataille et de gloire, en versant 古き栄えある戦場を、不吉な鮮紅色と
L'écarlate sinistre et la pourpre cruelle 悲惨な深紅の色をあたりに注ぎながら。
De ses reflets, pareils aux larges flots de sang ! 血の大波にも似た、太陽の光の。

Que le vent, aux clameurs de victoire et de rage, 風は、勝利と狂熱の喧騒に応え
Le vent qui dispersait la cendre des foyers, それは家庭の灰を雲散霧消させる風で、
Mêle à leur tombe ardente, avec un bruit d'orage, 嵐の音とともに、彼らの熱い墓に、
Le superbe frisson des drapeaux déployés ! 広げられた旗の誇り高き戦慄を交える。

こうして詳細に観察すると、この詩がいかに『習作と前奏曲』に収められた他の詩とは趣を

異にするものであるか、ということがよく分かる。そしてこのような特異性のために、第2版からは削除されたのであろうという推測も妥当なものとして成り立つように思われる。また、少女時代の草稿にあった「コブレンツの思い出」を知らない圧倒的多数の読者にとっては、ヴィヴィアンのイメージにそぐわない不思議な詩との印象を持たざるを得ない詩であるともいえる。それとは裏腹に、「コブレンツの思い出」を知った読者にとっては、この詩の中にその残滓を明らかな形で認めざるを得ないのもまた事実である。たとえば、「らっぱ (clairon)」という単語は、『習作と前奏曲』だけでなく、他のヴィヴィアンの作品を通してもおそらくハパックスではないかと思われるが、この詩にも「コブレンツの思い出」にも共通して用いられている。また、「馬の足取り (piétinement des chevaux)」も、そのまま「コブレンツの思い出」に見出される表現であると同時に、他の作品では見られない表現でもある。同じく、「古い戦 (ancien combat)」という表現も、「コブレンツの思い出」にある、「今となつては昔の戦いの (D'un combat maintenant ancien)」という詩句の反映が見られるものだといえるのではないだろうか。

このほかに、「コブレンツの思い出」からは若干の変容を被りながらその余韻を感じさせるような表現ももちろん散見される。たとえば「コブレンツの思い出」では、詩句冒頭に繰り返し用いられ、読者の視線の移動を促していた「彼方に (là-bas)」という表現は、「不安な死者たち」の中では第1連2行目の詩句末、「戦い (combats)」と脚韻を構成する位置に置かれている。フランス韻文詩の構成においてこの位置が詩句冒頭よりも重要な位置にあるのは明白である。またこのことは、「コブレンツの思い出」が一人称で書かれ、自分の体験と感概を読者に訴える、というディスクールの形で展開されているのに対して、「不安な死者たち」が、完全に一人称を排し、三人称による客観的な描写の様相を帯びていることと無関係ではないのかも知れない。このほか、「コブレンツの思い出」では繰り返し用いられた「墓 (tombeau)」という単語が、「不安な死者たち」では、「墓石 (tombe)」あるいはより文語的な「墳墓 (sépulcre)」という語に置き換えられていたり、「兵士 (soldats)」という単語は、これもより古い表現である「戦士 (guerriers)」という語に置き換えられていたりする。そのほかにも、「花もない (sans fleurs)」「家庭 (foyer)」「悲惨な (cruel)」「埋められた (enfouis)」「原 (champs)」といった表現や単語がテキストには散見され、「コブレンツの思い出」の遠い反響をそこに聞くことが可能になっているのである。

しかしながら、「不安な死者たち」と一連の「コブレンツの思い出」で、大きく異なっている特徴もまた存在する。それは、「コブレンツの思い出」において頻出していた「コブレンツ (コブランス, Coblence)」 「ドイツの (allemand)」 または「プロイセンの (prussien)」 「フランスの (français)」 といった固有名詞が、「不安な死者たち」では完全に姿を消しているという特徴である。また、具体的な表現である「演習場 (champ de manœuvre)」という表現も、より一般的な「戦場 (champ de bataille)」に変容している。これらのことから、「不安な死者たち」

の眠る戦場は、いつどここの戦闘のことかは敢えて明示されないことになって、却って普遍的な性質を帯びるものであるといえるのではないだろうか。上に見たように、「不安な死者たち」では、「墳墓 (sépulcre)」や「戦士 (guerrier)」などの古語が用いられているということも、ここで話題になっている戦闘がむしろ太古の昔のものであり、また遠い異国のものであるかのような印象を与える効果をもたらし、この、「不安な死者たち」における固有名の消失と連動して、この詩に普遍的な価値を与えているのではないかと思われるのである。

また、ささやかながら「コブレンツの思い出」では重要な意味を担っていた「敵 (ennemi)」という語が姿を消し、「復讐 (vengeance)」という語もこの詩からはなくなっている。わずかに、「勝者 (vainqueur)」「敗者 (vaincu)」という語が残るのみで、「コブレンツの思い出」に色濃く残っていたプロイセンすなわちドイツへの遺恨を晴らしたい、あるいは晴らそうと訴えかけるようなメッセージ性は、「不安な死者たち」では感知できなくなり、戦場で命を落とした兵士たちの姿を描いてその無常が物語られている、といった描写的な詩としてその様相は一変しているのだということが分かる。「コブレンツの思い出」において読者を鼓舞していた一人称の主体が「不安な死者たち」では姿を消している、という語りの転換も、このような様相の変化に加担しているものといえるだろう。

さて、ここまではヴィヴィアン自身の詩作におけるテキストの変容過程のみを、少女時代の創作ノートの散文、同じく少女時代の一連の未発表の韻文詩「コブレンツの思い出」、処女詩集『習作と前奏曲』に収められた「不安な死者たち」と順を追って観察してきたが、おそらくほかの詩人のテキスト、たとえばラシーヌやランボーを投影させてみたい誘惑にかられる向きもあるのではないだろうか。たしかにラシーヌの場合、「残酷な (cruel)」「叫び (cri)」「煙 (fumée)」「拡がった血のうねり (large flot de sang)」「気高い (superbe)」「戦慄 (frisson)」という語彙が、『フェードル』におけるイポリットの最期を語るテラメヌの長台詞を彷彿とさせるものであることは否めないように思われる。しかし、限られた草稿や手紙類からは、ヴィヴィアンがラシーヌを参照した実証的な根拠は見出し得ないのであって、この時期の詩人一般にラシーヌの影響はよく見られるものであることから、その可能性を示唆するだけにとどまらざるを得ないというのが 理性的な態度というものであろう。

ランボーについては、この「不安な死者」に関連して、まさしく普仏戦争の敗北を背景にして眠るように大地に横たわる戦死者を歌った「谷間に眠る者 (Dormeur au val)」を即座に思い浮かべることができるだろう。ヴィヴィアンにおける「コブレンツの思い出」から「不安な死者」に至る時期、すなわち 1894 年頃から 1901 年頃にあつては、ランボーおよびその作品は忘却の淵をさまよっていた時代であると一般に考えられているが、1890 年代に、ヴィヴィアンがその大部分の作品を発表した同じアルフォンス・ルメール社から、『フランス 19 世紀詩人選集 (Anthologie des poètes français du XIXème siècle)』全 4 巻が出版され、そのうちの第 4 巻に、

ランボーのこの詩が紹介されている¹⁹⁾。ということであれば、この時期のヴィヴィアン、とりわけパリに舞い戻って『習作と前奏曲』初版に収める詩を吟味していた頃のヴィヴィアンが、「谷間に眠る者」を目にした可能性が全くないわけではなく、「不安な死者たち」の中にその反映が見出されるとしてもなんら不思議なことではないといえるのかも知れない。

3. もうひとつの「不安な死者たち」

ところで、「不安な死者たち」が『習作と前奏曲』の初版に収められていたものの第2版では削除されていたということは先に述べたとおりである。その後1923年にアルフォンス・ルメール社から出版された『ルネ・ヴィヴィアン全集』にはこの詩は収められており、この全集が以後のヴィヴィアン作品の典拠となるが多かったため、後年の読者たちにとっては「不安な死者たち」も『習作と前奏曲』に収められたものとして知られてきた。ただ、その内容がいわゆるヴィヴィアンらしくないものなので、テーマ批評的なあるいはフェミニズム批評的な研究の中では看過されてきた経緯がある。ところが、1915年7月1日付の『メルキユール・ド・フランス』誌に、「不安な死者たち」はかなり異なる形で発表されている。以下にこのもうひとつの「不安な死者たち」の原文と和訳を載せておきたい。ちなみに、原文に筆者が下線を施した箇所は、先に見た『習作と前奏曲』初版の「不安な死者たち」と異なっている箇所である。

Les Morts inquiets

不安な死者たち

Salut, un fier salut, aux fosses martiales,
Où rêve les guerriers assoupis un instant,
Et dont le nom sonore, en un bruit de cymbales,
Roule dans l'avenir qui se lève éclatant.

救いを、誇り高き救いを、塹壕に
そこでは戦士の夢が一瞬まどろんでいる
そしてその音高き名は、シンバルの音となり、
輝かしく立ち上る未来へと拡がって行く。

Ils ne s'enivrent point du sommeil solitaire
Où l'esprit s'alanguit, ainsi que le corps las ;
La douceur de dormir dans le sein de la terre,
Seuls entre tous les morts, ils ne la goûtent pas.

彼らが孤独な眠りに酔うことは絶えてなく
そこに精神は倦む、肉体が疲れるように、
大地の掌に抱かれて眠るという安穩を、
全ての死者たちの中で彼だけが味わえない。

Car leur sépulcre est plein de cris et de fumée
Les vaincus ont encor la haine du vainqueur,
La mèche du canon y demeure allumée,
Le rouge vif du meurtre est toujours dans le cœur.

その墓が叫びと煙に満たされているがために。
敗者は勝者の恨みを今も抱き続け、
大砲の導火線は今も灯っている、
殺戮の赤は変わらず胸のうちにある。

Ils attendent, tout près à se lever encore,	彼らは待機し、いつでも起きられるように、
Les premières lueurs, le clairon du réveil,	最初の曙光、起床のラッパの音、
Le lourd piétinement des chevaux à l'aurore,	暁に歩を進める馬の重い足取り、
Les chansons du départ... et la marche au soleil !	出発の歌、そして太陽のもとの歩み。

Que le ciel triomphal du couchant leur rappelle	落日の勝利の空が彼らに思い出させる
Les vieux champs de bataille et de gloire, en versant	古き栄えある戦場を、不吉な鮮紅色と
L'écarlate sinistre et la pourpre cruelle	悲惨な深紅の色をあたりに注ぎながら。
De ses rayons, pareils aux larges flots de sang !	血の大波にも似た、太陽の光の。

Que le vent, <u>frémissant de leur antique</u> rage,	風は、古の狂熱に震え、
Le vent qui dispersait la cendre des foyers,	それは家庭の灰を雲散霧消させる風で、
Mêle à leur tombe ardente, avec un bruit d'orage,	嵐の音とともに、彼らの熱い墓に、
Le superbe frisson des drapeaux déployés !	広げられた旗の誇り高き戦慄を交える。

この詩の末尾には、Renée Vivien の名が記され、注記として1901年に書かれた未発表の詩とある。1915年当時には、『習作と前奏曲』の初版は世に知られることなく、さらに普及した第2版からは削除されていたことから、「未発表」とされた当時の状況をうかがい知ることができる。しかし、没後すでに6年も経過し、おそらく半ば忘れ去られていたはずのヴィヴィアンの名をかたってこの詩が「初出」として『メルキュール・ド・フランス』に発表されたのは、誰のどのような意図によるものなのだろうか。しかもこの詩の前半の3連は、ほとんど改作といってもよいような変更が加えられているのである。

また、同じ『メルキュール・ド・フランス』の翌月号には、この詩に対する補遺が掲載されている²⁰⁾。それによると、4行目の Roule dans l'avenir は Roule vers l'avenir. であり（下線筆者、以下同じ）、12行目の Le rouge vif au meurtre は Le rouge soif au meurtre. であり、16行目の Les chansons du départ... は、Les chansons du départ. であるということになっている。これらの補遺は何を物語るものなのだろうか。4行目と12行目は初出では見られなかった詩行なので、何を根拠にこの訂正が行われたのか不明であり、16行目は初出でも三点リーダーとなっている箇所なので、これも誰のどのような意図で訂正が行われているのか分からないのである。また、一見して分かるように、活字であるにせよ、手書きの原稿であるにせよ、見間違いや校正によってこのような補遺がもたらされる結果になったとは思われず、誰によるものであるかは不明ながら、推敲の結果の補遺であると考えるのが自然であろう。

即座に考えられるのは、ヴィヴィアンの死後、ほとんどの草稿類を所有していたと考えられるエレース・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルトが、『習作と前奏曲』初版以降にヴィヴィアンが推敲を重ねていた原稿を公表したか、あるいはニーヴェルト自身が推敲して公表したか、ということである。ではなぜ、1915年の7月の『メルキュール・ド・フランス』にそれは発表されたのか。ヴィヴィアンは生前、『メルキュール・ド・フランス』に詩が掲載されることはなかった。死後6年にして機が熟し、後見としてのジュイレンがその榮譽をヴィヴィアンのこの詩に与えたということなのだろうか。しかし、ヴィヴィアンの詩作としては異質な趣のある詩が、なぜただひとつここで選ばれたのであろうか。今となっては疑問の残るところではある。

取えて仮説を挙げておくと、1915年7月は第1次世界大戦の最中であり、この年の4月にはベルギーのイーペルの戦場でドイツ軍が毒ガスを使用し、フランス兵約5000人が死亡している。また、5月にはイギリスの客船ルシタニア号がドイツ軍の魚雷の攻撃を受けて沈没し、アメリカ人を含む1000人規模の犠牲者が出ている。この事件がきっかけとなって米国の世論が一気に参戦に傾いたことはよく知られている事実である。

確かにヴィヴィアンのこの詩のほかにも、この時期の『メルキュール・ド・フランス』には、戦争を題材にした詩が散見され、反独といった世論形成にこのような文芸雑誌も一役買っていたのだと考えることができるのかも知れない。ヴィヴィアンの少女時代の草稿にあった「コブレンツの思い出」とは異なり、「不安な死者」のテキストからは、コブレンツやドイツ、あるいはプロイセンといった固有名はなくなり、一読しただけでは単なる反戦を唱える詩のように見えるのであるが、さまざまなコンテクストを了解していたヴィヴィアンに近い人間が、それとなく本来反独の抗議のこもったこの詩を、この時期に、『メルキュール・ド・フランス』に滑り込ませたのかも知れない。とはいえ、それほどヴィヴィアンに近い人物であれば、この詩が「未発表」のものではないことは承知しているはずであり、それは『メルキュール・ド・フランス』の但し書きとは矛盾することになる。そのことは承知の上で取えて注目度を上げるために「未発表」としたのか、単なる『メルキュール・ド・フランス』のミスなのかは今となつては分からないが、このようにしてもうひとつの「不安な死者」が1915年の『メルキュール・ド・フランス』に発表されたことにはそれなりの意味があるように思われる。また、このことと関連して、題名に定冠詞(les)が付加され、「その不安な死者たち」と特定化が行われていることにも、何らかの意味があるといえるのではないだろうか。

おわりに

このようにして、この「不安な死者たち」は、ヴィヴィアンが意図したところとは異なる位相のもとに、『習作と前奏曲』初版から14年を経て再び日の目を見ることになった。ルネ・ヴィ

ヴィアンの名のもとに、おそらく最もルネ・ヴィヴィアンらしからぬ詩が読者の視線にさらされることになったのである。詩人の死後の詩の運命は、詩人のあずかり知らぬところであり、反独という世論の形成に供されたこの詩が、実にヴィヴィアンが少女時代に抱いたドイツに対する敵愾心が契機となって編まれた詩であることには何か因縁めいたものを感じさせる。この詩をヴィヴィアンの名のもとに発表したのが、のちの戦争でナチス・ドイツに追われることとなったユダヤ系のニーヴェルトだとすると、本人の意図とは別に、それはそれでまた不可思議な縁に導かれているようにも思われる。

ところで、このこととは裏腹に、『習作と前奏曲』の初版から第2版への作品の推敲や削除には、創作の最盛期にあったヴィヴィアンの強い意図が働いているのではないかと考えられる。すなわち、「不安な死者たち」と同じく第2版からは削除された「永遠の復讐」と「アマゾン」は、どちらも男性に恋する女性が主人公となっている詩であり、「永遠の復讐」に至っては、ディスクールの詩であるとはいっても、途中でデリラが1人称の主体として心情を吐露する直接話法が少なからず含まれている。当然相手のサムソンも対話の宛てられる2人称として言及される。「アマゾン」も同じく、描写的な詩ではありながら、「彼女は陶酔を与えてくれる恋人たちを愛する (Elle aime les amants qui lui donnent l'ivresse)」²¹⁾と、アマゾンが男を愛する女であることが明記されている。この二篇の詩が削除されることによって、第2版の全体では、より「女だけの世界」が強調されることになり、「不吉な死者たち」の削除と相まって、その作品世界から完全に「男性なるもの」が排除される結果となっているのである²²⁾。

こうして見てくると、1901年の初版発表から1903年の第2版発表というわずか2年の間に、ヴィヴィアンはサッフォの愛を歌う女詩人としての自覚を強め、その作品世界を女同士の愛で塗り籠める強い決意を持って推敲を行ったということが観察できる。「不吉な死者たち」の第2版からの排除は、正義感に駆られてこの詩をものした自らの愛国的な少女時代への決別を物語るものであったのかも知れない。

註

- 1) フランス国立図書館所蔵の草稿、書誌番号 NAF26579～26581 (「ルネ・ヴィヴィアンの手帳 (Carnets de Renée Vivien)」) および NAF18192 (アメデ・ムレ宛書簡)。
- 2) これまでの論考については、拙論「詩の生成—ポーリーヌ・メアリ・ターン「コブレンツの思い出」をめぐって— その1」『富山大学人文学部紀要』第62号、2015年2月、269頁～285頁および、「詩の生成—ポーリーヌ・メアリ・ターン「コブレンツの思い出」をめぐって— その2」『富山大学人文学部紀要』第63号、2015年8月、313頁～327頁を参照のこと。
- 3) R. Vivien, *Études et Préludes*, Alphonse Lemerre, 1901.
- 4) この時の出版事情については、Jean-Paul Goujon, *Tes blessures sont plus douces que leurs caresses — Vie de Renée Vivien —*, Régine Deforges, 1986, pp. 158-163 に詳しい。

- 5) R. Vivien, *Cendres et Poussières*, Alphonse Lemerre, 1902.
- 6) R. Vivien, *Brumes de Fjords*, Alphonse Lemerre, 1902.
- 7) R. Vivien, *Évocations*, Alphonse Lemerre, 1903.
- 8) Jean-Paul Goujon, *Tes blessures sont plus douces que leurs caresses — Vie de Renée Vivien —*, Régine Deforges, 1986, p. 162.
- 9) Sapho, *Sapho — traduction nouvelle avec le texte grec —* traduit par Renée Vivien, Alphonse Lemerre, 1903.
- 10) 1903年から1904年にかけて、ルネ・ヴィヴィアンは、エレーヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルトと共同でポール・リヴェルスタール (Paule Riversdale) という筆名で、3つの作品 (韻文詩集『こだまと反映 (*Écho et Reflets*)』、小話集『根付 (*Nétsuké*)』および小説『二重の存在 (*L'Être double*)』) をアルフォンス・ルメール社から発表している。この他に、ヴィヴィアン死後の1909年になって、同じ著者名で詩集『愛の方へ (*Vers l'amour*)』がエルンスト・サンソ社から発表されるが、ヴィヴィアン生前の3作とは内容の完成度に格段の差があるため、後者はニーヴェルト単独でこの筆名を標榜したものではないかと考えられている。
- 11) Renée Vivien, *Études et Préludes*, Alphonse Lemerre, 1903 および Renée Vivien, *Cendres et Poussières*, Alphonse Lemerre, 1903。ちなみに、『喚起』は、1905年に同じく Renée Vivien の名で1905年に第2版が出版されている (Renée Vivien, *Évocations*, Alphonse Lemerre, 1903)。
- 12) Renée Vivien, *Poèmes de Renée Vivien*, tome I, Alphonse Lemerre, 1923。この巻には *Études et Préludes*, *Cendres et Poussières*, *Évocations*, *Sapho*, *La Vénus des Aveugles* が収められており、第2版がある場合は第2版の内容を再録している。また、第2巻は1924年に出版されており (Renée Vivien, *Poèmes de Renée Vivien*, tome II, Alphonse Lemerre, 1924), *Les Kitharèdes*, *À l'heure des mains jointes*, *Sillages*, *Flambeaux éteints*, *Dans un coin de violettes*, *Le Vent des vaisseaux*, *Haillons* の各詩集が収められている。
- 13) Renée Vivien, « Les Morts inquiets », *Mercur de France*, 1^{er} juillet 1915, p. 472.
- 14) 表の作成にあたっては、R. Vivien, *Études et Préludes*, Alphonse Lemerre, 1901。の末尾 pp. 155-157 の索引を参照した。
- 15) 「シャンソン」はソネットほど厳格に詩形が定義されるものではないが、中世以来連綿と作られてきた詩のジャンルのひとつである。19世紀後半のバンヴィル、ヴェルレーヌあるいはランボーにおいては、民衆に歌われた歌 (いわゆる「シャンソン」) を反映させたものとして、とりわけ五音綴詩句によるシャンソンが好んで詠まれている。ヴィヴィアンがこの詩集で詠んでいる「シャンソン」はすべて八音綴であり、必ずしもこれら先達の詩人たちの奇数脚によるシャンソンを継承したものとはいえないが、これはヴィヴィアン自身の好みを反映させたものであると考えられ、その詩に中世風の響きを与えているように思われる。19世紀末における「シャンソン」のあり方については、吉田正明「ランボーとシャンソン」『信州大学人文学部紀要』、1999年、191頁～205頁に詳しい。
- 16) ディスタール (discours), レシ (récit) および人称との連関については、バンヴェニストによる『一般言語学の諸問題』における諸定義を参照している (Émile Benveniste, *Problèmes de linguistiques générales*, tome I, Gallimard, 1966)。
- 17) 小論でいう「性別」「男性」「女性」の概念は、生物学的特性ではなく、むしろ多分にジェンダー的なものである。
- 18) R. Vivien, *Études et Préludes*, Alphonse Lemerre, 1901, p. 121.
- 19) Alphonse Lemerre, *Anthologie des poètes français du XIXème siècles*, tome IV, p. 107.
- 20) « Errata au poème de Renée Vivien, les Morts inquiets, publié dans no du 1^{er} juillet », *Mercur de France*, le 1^{er} août 1915, p. 816
- 21) R. Vivien, *Études et Préludes*, Alphonse Lemerre, 1901, p. 143.

- 22) そして、この詩の削除とともに、「復讐 (vengeance)」という語も第2版の全体から姿を消すことになる。少女時代の草稿の「コブレンツの思い出」の中では重要な位置を占める語であっただけに、このことも「不安な死者たち」から「敵」や「復讐」という語が排除されていたことも含めて、第2版ではそのような男性原理の発露たる戦争の痕跡が完全に抹消されたのだと考えることもできよう。

